R1年9月　新聞記事（山陰中央新報）

令和1年9月5日付・山陰中央新報

創作絵本 ラオスへ届け

「だるま落とし」題材 日本文化ちりばめ

動物主人公 学び方工夫

県立大国際交流サークル

ラオスの子どもたちの教育に役立ててもらおうと、島根県立大国際交流サークルのメンバーがオリジナルの絵本を作り、現地に届ける準備を進めている。日本文化などを紹介する内容で、学生たちは「楽しんで学んでもらえたら」と張り切っている。（坂本彩子）

サークルは発展途上国の教育支援を目的に今春設立し、1、2年生22人で活動。メンバーの知り合いにラオス出身者がいたため、まずは同国との交流を進めることにした。ラオスの人口は約700万人で、2017年の1人当たり名目GDP（国内総生産）は、日本の約15分の1の2542ドルにとどまり、15年の識字率は84・7％と、世界平均を下回っている。

絵本は、物語や挿絵を学生らが担当。日本の伝統的なおもちゃ「だるま落とし」をプレゼントされたウサギが遊び方を知らず、見かねたゾウがヒントを示し、みんなで楽しむというあらすじ。現地の子どもたちに、試行錯誤しながら物事を進めることの大切さを伝えつつ、日本文化の紹介をちりばめる工夫をした。

すでに下絵が完成しており、今後はラオス語に翻訳して製本し、11月に配送する予定。8月下旬には、メンバー3人が先行してラオスの首都ビエンチャンを訪問し、紙芝居にした物語を図書館で披露した。約30人の子どもたちが聞き入り、短期大学部総合文化学科2年の高瀬美咲さん(20)は「絵がかわいいと喜んでくれてよかった。訪問で得た学びを生かして、もっと工夫し、よりよい絵本を届けたい」と話した。

絵本のイラストを手に打ち合わせをするメンバー

令和１年９月23日付・山陰中央新報

難病の女子大生 島根ＰＲへ全力

松江の藤村光さん

ＳＮＳ大使に 古里への感謝込め

地元の洋菓子店を取材をする藤村光さん（手前）＝松江市上乃木３丁目

島根県立大1年の藤村光さん(18)＝松江市東出雲町揖屋＝が、難病の脊髄性筋萎縮症（ＳＭＡ）を患いながら、県内の観光スポットやカフェを会員制交流サイト（ＳＮＳ）で紹介するボランティアに励んでいる。病との向き合い方に悩んだ時、地元の神社で心を癒やされて地域の魅力を見つめ直し「多くの人が島根に訪れるきっかけをつくろう」と意気込んでいる。

（坂本彩子）

ＳＭＡは脊髄の運動神経細胞の病変によって起こる筋萎縮症で、支えなしに立ち、歩くのが困難になる。

藤村さんは子どもの頃から車いすで生活。松江緑が丘養護学校高等部1年だった2016年、体調を崩しやすくなり、試験の成績も振るわず悩んだ。

「何のために勉強しているんだっけ。学校をやめようかな」。やる気をなくしていた時、母祐子さん(46)に連れられ、神魂神社（松江市大庭町）を訪れた。境内に漂う澄んだ空気に風の音。初めての感覚に癒やされ、古里に素晴らしい場所があると知った。

「もっと地元について知り、魅力を多くの人に伝えたい」。夢が決まり、フィールドワークに力を入れる県立大人間文化学部地域文化学科を志望校に定めた。

体力が続かない中で机に向かい、今春入学した。

描いた夢をかなえようと県が任命する「ＳＮＳ観光ＰＲ大使」に手を挙げ、８月に活動を始めた。大学の友人に車いすを押してもらい、松江市内のカフェや田和山遺跡を紹介しようと取材を続ける。店の代表者と名刺交換してインタビューし、写真映えする被写体がないか友人と相談。成果は12月以降、県の公式ＳＮＳで発信する。

今後は英語の勉強にも力を入れる。「私は欲張りなんです。病気のハンディに負けず、活動の幅を広げ、島根の魅力を国内外多くの人に広めたい」。前向きにしてくれた古里への感謝の気持ちが藤村さんを突き動かす。